

# 論文審査の結果の要旨

氏名 猪熊 ひろか

本論文は、段差解消による道路のバリアフリー化という福祉のまちづくりを推進する際に生じた障害種別間の矛盾的状况に着目しながら、そこから技術や政策が不可避免的に有する排除の論理を読み解き、さらには技術や政策とは別様の問題解決を目指す視覚障害者たちのあり方をヒントに異質性を相互に認容し合う態度が持つ重要性を論じたものである。

構成は全部で6つの章となっており、序章で問題の背景や問題関心が述べられた後、1章ではこれまでの福祉のまちづくりについて概観が示される。そこでは「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」といった鍵概念が有する基本的な考え方やその相違が解説されるほか、福祉のまちづくりが類型別に整理される。また、福祉のまちづくりの一環で行われる道路改修を具体例として、これまで用いられてきた様々な技術的手法を紹介しながら、そうした技術、或いはその技術を用いる政策が、多くの人にとって都合のよいあり方を目指そうとしても、救いきれない人々を原理的に生み出してしまうという問題を有していることを指摘する。技術は境界条件を設けて最適解を求めることで発展していくが、境界条件の外側の問題にはどうしても消極的になってしまう傾向がある。政策にしても、ある一つの政策は誰かにとって都合のよいものとして導入されても、別の人にとってはかえって不都合であるという事態がしばしば生じてしまう。技術や政策がそのような原理的限界を有することを視野に入れた途端、そこに別の見方が開けてくる。それこそが本論文が立脚する、今ここに困っている人がいるということにまずは注目しようとする視点である。技術や制度に解決を見いだそうとする現代社会の陥穽を原理的に見抜き、これを突破する視点を見いだそうとする切り口は独創的であり、意義深い指摘と言える。

2章と3章では、上述の技術や政策の限界や、弱者の存在を起点とする問題の再構成を、岐阜県高山市で実際に行われた福祉のまちづくりを事例にしながら具体的に示していく。2章では福祉観光都市を目指した高山市の事例の概要とともに、「原則的同意」に基づいて事業が進められていった経緯が明かされる。そして、観光と福祉との両立を目指す戦略そのものの内に、政策の対象が結果的に限定されてしまうことが明らかにされる。3章ではその政策から結果的に排除されることになる視覚障害者の振るまい方に着目し、特に彼らが車いす使用の身体障害者との間で利害相反者として対立姿勢を示すのではなく、逆に相互に異質な存在であることを認め合う関係を取り結ぼうとすることに焦点が当てられる。視覚障害者たちは、カラー舗装化を受け入れる代わりにガイドヘルプの拡充という別様の解決策を求めることで排除の関係を避け、配慮の関係への転換を

見せようとする。さらにガイドヘルパーとの関係も、障害に対する機能的充足の面だけではなく、もっと人間同士の関係性を重視して相互の気遣いを引き出すことで、自らにとって満足度の高い結果が得られることを目指そうとしている。このような配慮や気遣いに基づく関係性こそ、一人の弱者の個別性に目線を合わせ、技術や制度が不可避免的に生み出す隙間を埋めようとする態度にほかならない。

4章ではこの関係性を理論的に多様性概念と結びつける試みが為される。この過程では介助者に機能性よりも関係性を求める高山の事例を基に、本質の差異を認め合うことから排除状態を回避する可能性が見いだされる。そして普遍性を目指すユニバーサルデザインの思想に対置する形で、個別性にこだわって障害を一つずつ取り除いていこうとするバリアフリーの思想を位置づけていく。さらに終章にかけて、多様な個の存在が相互に異質性を容認しながら共存する可能性は、技術や制度の向上だけでは原理的に達成できず、このような思想と組み合わせることの必要性を説く論文の結論が明らかにされていく。

本論文の独創性は、上述の通り福祉のまちづくりの一事例を丹念に追うと同時に、異質性の相互認容やそれに基づく多様性概念の重要性といった理論的考察を行う、その往復運動にある。また、問題解決を技術や制度に依存しがちな社会の現状を省みれば明らかかなように、この議論が示唆するものは福祉領域にとどまらない広汎性を有している。その意味で、本論文が果たした功績は現代社会論の文脈でも高く評価できるものである。確かに、一部において事例から乖離した抽象的議論を展開しすぎている嫌いもあるが、本論文全体の学術上の価値を損ねるほどのものではない。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士(環境学)の称号を授与するにふさわしい業績として認めるものである。

以上 1917 字